



Title	Male reproductive characteristics and genetic polymorphism of feral raccoons (<i>Procyon lotor</i>) in Hokkaido [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	奥山, みなみ
Citation	北海道大学. 博士(獣医学) 甲第11275号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56306
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Minami_Okuyama_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（獣医学）

氏名：奥 山 みなみ

審査委員	主査	教授	坪	田	敏	男
	副査	教授	昆		泰	寛
	副査	准教授	永	野	昌	志
	副査	准教授	下	鶴	倫	人
	副査	教授	池	田		透（文学研究科）

学位論文題名

Male reproductive characteristics and genetic polymorphism of feral raccoons (*Procyon lotor*) in Hokkaido

(北海道に生息する外来種アライグマ(*Procyon lotor*)における雄の繁殖特性および遺伝多型に関する研究)

アライグマ(*Procyon lotor*)は、北米原産の哺乳類であり、北海道では1979年以降野生化が確認され外来種として定着している。これまでアライグマによる農業被害が増加し、さらに生態系への影響および人獣共通感染症媒介の可能性などが危惧されることから、北海道では外来生物法のもと緊急対策としての捕獲・防除を行っている。しかし、現在分布拡大および個体数増加に歯止めがかかっているとはいえない状況である。外来生物の効果的な防除には、その生息域における基礎生物学的な情報の収集が不可欠であり、特に個体数増加に関わる繁殖生理学的情報、および分布拡大に伴う個体群の遺伝情報を明らかにする必要がある。その観点から、本研究においては雄の繁殖特性および北海道に分布する遺伝多型を明らかにすることを目的とした。

1) 雄の繁殖特性

219個体の雄アライグマの個体計測および生殖器の組織観察によって、性成熟時期を特定し、成雄の季節繁殖性を明らかにした。春に生まれた雄個体の多くは1歳で迎える翌5月から生殖腺の発達が始まり、冬の交尾期を前にした10月には精子形成が完了することが明らかになった。一方、十分に体が成長した個体については0歳のうちに精子形成を行っている早期性成熟個体が確認された。性成熟に至った雄は、冬の交尾期に高い血中テストステロン濃度を示し、活発に精子形成を行っていることが確認された。季節繁殖性を示す雄動物の多くは、非交尾期には低血中テ

テストステロン濃度に伴う精子形成機能の停止が認められるが、アライグマにおいては、非交尾期である夏に血中テストステロン濃度が低いにも拘わらず活発に精子形成を行っている個体が確認された。このことは雄アライグマの繁殖生理学的特徴であるといえる。さらに、夏の精子形成維持機構の詳細を明らかにするため、精巣組織における4種のステロイド代謝酵素およびアンドロゲン受容体(AR)の発現を、免疫化学組織的手法を用いて評価した。その結果、季節的な血中テストステロン産生は3 β HSD発現がキーファクターとなり季節的な変化を示していることが示唆された。また、夏に精子形成機能を維持する機構には、P450aromによって産生されるエストラジオールの働きと、精巣組織におけるARによるテストステロン感受性が維持される必要があることが示唆された。

2) 北海道に分布する遺伝多型

北海道全域から526個体分の遺伝子材料を収集し、ミトコンドリアDNAのD-loopにおける遺伝多型を明らかにした。サンプルの多くは、その収集時に性別が確認できたが、一部性別不明のサンプルについては、ZFX/ZFY遺伝子の塩基配列差異に基づく性判別手法を確立し、その手法を用いることで雌雄判別を行った。ミトコンドリアDNAのD-loopをターゲットとしたPCRを行い、増幅された682bpのDNA断片の塩基配列を解析した結果、北海道のアライグマにおいて7つのハプロタイプの遺伝型を確認した。先行研究の結果を鑑みると、北海道において導入された母集団は、少なくとも8つの異なるハプロタイプを持つ個体から構成されていたことが示唆された。本研究で確認された7つのハプロタイプのうち、3つは北海道に広く分布しており、それらを含む5つのハプロタイプは本州や九州でも存在が確認されていることから、アライグマの初期導入が原産地から日本の複数の地域に導入された、もしくは日本国内での移動による再導入が起こったことが示唆された。また、同様にアライグマが外来種として問題になっているヨーロッパで報告された北米原産のハプロタイプが北海道を含む日本の複数箇所で確認されたことから、本研究によって初めて、原産地である北米からペットや毛皮動物として世界中に輸出導入されたアライグマが日本の複数個所にも導入されたことが明らかになった。今後さらに調査地を広げ、マイクロサテライトDNAを対象とした解析を行うことで、個体群間および個体群内の遺伝的差異、地域間での遺伝的交流の有無、さらには導入初期の個体数推定などの解明が求められる。

本研究によって得られた繁殖生理学的知見は、アライグマの早期性成熟や非交尾期における生殖能力の維持を示すものであり、北海道での個体数増加の一因である繁殖力の強さの一端を解明することができた。また、アライグマの生息域拡大に伴う遺伝型の分布を明らかにしたことで、初期導入がどのような経緯で起こったのかを一部推察することができた。これらの知見は今後の北海道におけるアライグマ防除計画等の科学的根拠を示すものであり、その意義は大きい。よって、審査委員一同は、上記学位論文提出者奥山みなみ氏の学位論文は、北海道大学大学院獣医学研究科規程第6条の規定による本研究科の行う学位論文の審査等に合格と認めた。